

作家

乙武洋匡さん

大ベストセラー『五体不満足』出版から今年で13年目。最近はどのような活動をしているのだろうか？と気になっていた会員も多いことだろう。

2010年3月まで小学校の教員として活躍し、その経験をもとにした小説、『だじょうぶ3組』を出版した乙武洋匡氏に、教員の経験談、今後の活動等について伺った。「自己肯定感」を育むということ、「みんなちがってみんないい」と個性を大切にすることの重要性について、貴重なお話を伺うことができた。

(聞き手・構成：伊藤敬史，難波知子)



— 2010年の3月まで、3年間小学校の教員をしていたのですが、何故、教員になろうと思ったのですか。

大学を卒業してから7年間、スポーツライターをしていました。その間、2003年に、長崎市の中学校1年生の子が幼児を殺害したり、その翌年には佐世保市の小学6年生がカッターナイフで友人を殺害したりと、十代前半の少年少女が、命を奪われる側だけではなく、奪う側になる事件が相次ぎました。

このような事件について、マスコミは、凶悪犯罪の低年齢化、最近の子供たちはどうなっているのかという論調で大々的に報じていましたが、僕自身はそれとは異なり、「かわいそうだな」と思ったのです。

僕には、今二人息子がいますが、新しい命が生まれる瞬間に、人間というのは幸せになりたいという思いで生まれてくるということを実感しました。そのとき、彼らだってきっと同じだろうと思いました。

しかし、十数年の間の環境、出来事、出会い等さまざまな要因によって、犯罪をせざるを得ない立場に追いやられたのです。きっと彼らもその間SOSを

出していたのではないのかと思います。そのSOSに気付かなかった、軌道修正してあげられなかった周りの大人にも責任があるのではないかと思いました。

— そうですね。

子供が成長していくときに、もっと大人が責任を持って関わって行くことが必要だと思いました。

そう考えたとき、自分は本当に恵まれていたなと思いました。僕は、両親、学校の先生の優しさと、正しい厳しさを持って接してもらうことができました。重度の障がいがあると周りからかわいそうだと等と言われて、卑屈な生き方になってしまいがちなはずが、今僕が、充実した生活をおくれているのは、周りの大人に恵まれていたからだと思います。

このように、僕には、上の世代への感謝の気持ちがいっぱいありました。そして、今度は、上の世代から受けてきた恩を自分が返す番であると思い、29歳のときに、もう一度大学に入り直し、教員免許を取って2007年4月から杉並区立の小学校に勤務しました。

—実際に教育現場に入ってみて、いかがでしたか。

一番驚いたことは、学校というのは、9割は杞憂でできているということです。「あんなったらどうしよう」、「こうなったら困る」、「だから止めておこう」という結論になることがとても多かったです。

—具体的にはどのようなことがありましたか。

例えば、僕が理科を教えたときに、春先にいんげん豆を植えました。数ヶ月して実がなって、家庭科室で茹でて、お茶か何かで乾杯して食べる収穫祭のようなものをやろうという計画を立てていました。

しかし、結果的には、「学校で給食以外のものを食べておなかを壊したら問題」ということで中止になってしまいました。その結果、いんげん豆は持ち帰ってもらい、子供たちは、家に帰ってから食べたのです。しかし、これは、おなかを壊す可能性を学校から家庭へ先送りしただけです。一事が万事こんな感じでした。

もちろん、教育現場には、保護者からの過剰な要求やマスコミからの批判等があり、それ故、今のような状態になってしまったことにある程度の理解はしています。ただ、このままで一番不利益を蒙るのは子供たちです。せっきく自分たちで育てたものを収穫し、食べ、分かち合う機会、さまざまな経験をする機会が奪われてしまうのです。

なんとか改善していきたいと考えた結果、保護者との信頼関係を築くことが重要だと思いました。

—保護者と信頼関係を築くために、具体的にどのようなことをしたのですか。

毎日のように保護者へ「オトフォン」と称して、電話を掛けました。普通、担任から電話が掛かって来たら、「何かうちの子が悪いことをしたのではないか」と思うのですが、僕は、その子が何か学校で頑張ったことをしたときに、電話をするようにしました。つまり、「今日は〇〇さん、苦手な逆上がりの練習を頑張っていたんですよ。」「〇〇くん、普段は引っ込み

思案なのに、〇〇委員に立候補してくれたんですよ。」等と伝えるわけです。

結果が出たことなら通知表に書くことができます。しかし、逆上がりの練習を頑張ったけどだめだった、立候補したけど他の子に決まってしまったということは、なかなか通知表に書けません。僕は、結果が出なかった努力を親に伝えないのは寂しいと思ったので、電話で伝えるようにしたのです。

—保護者の反応はいかがでしたか。

だんだんと報告を楽しみにしてくれるようになりました。そうすると、いざ、その子が何かトラブルに巻き込まれたとき、「この先生は普段からうちの子を見てくれている」という信頼関係があり、保護者の方が信頼して任せてくれるので大変やり易くなりました。

—乙武さんは、最近、『だいじょうぶ3組』という小説を書かれましたが、小説の中で、障がいをもったお姉さんに悩む子どもがいたときに、「それって変?」というテーマで学級会を開く場面があり、とてもいいお話だなと思いました。あのような授業も実際あったのですか。

僕自身が、著書『五体不満足』から一貫して伝えてきたメッセージは、「みんな違ってみんないい」ということです。

まだまだ日本ではマイノリティと言われる人への目線が無理解であったり、不慣れが手伝ってしまうことによって、その人たちが生き辛くなってしまっている現状があります。また、一面的な捉えられ方をされていることもあります。例えば、障がい者であれば「かわいそうな人たち」、同じ障がいであっても色々な人がいるのに「この障がいだからこうだ」等々。

そのような、「普通こうだよね」という無駄な常識が一人ひとりの個性を苦しめてしまっている現状があります。

それで、子供のころから、「みんな違ってみんないい」ということを、考えてもらうことができればいいなと思い、あの授業を設定してみました。

——実際に子供たちの反応はどうでしたか。

「僕の体について」という命題を提示すると、「確かにうちの先生は他の人と体がずいぶん違う。しかし、それって変なことなのか？ いけないことなのか？」と子供たちは、すごく真剣に自分に近いものとして考えてくれました。

そういう意味でも、「みんな違ってみんないい」という個性の問題であったり、マイノリティに対する見方を伝えていくために、僕の障がいがとてもプラスに働いているのかなと思いました。

僕自身が大学生のときに、自分の障がいの意味について、ほとんどの人は手足があって生まれてきているのに、奇跡的な確率で手足が無い体に生まれてきたことに何か意味があるのか、つまり、こういう身体の人間でなければできないこともあるのかなと考えました。その結果、「一人ひとり違うんだ」、「みんな違ってみんないいんだ」ということを考える資質を与えられたと捉えることにしました。そして、それを伝えるために、教員をしたり、こういう風にメッセージを伝える仕事をしているのです。

——個性を大事にすることは、とても大切なことだと思うのですが、教育現場というものは、必ずしも個性を生かしていないことが多いような気がしますね。

そうですね。よく子供たちの個性を育てていくことが大事といますが、よくよく考えていくと個性は育てていくのではなく、もともと子供たちに備わっているものなのです。問題は、それを受け止めてあげられる大人がいるのか、社会があるのかということになると思います。

僕は、スポーツライター時代に、プロ野球の城島捕手から、「ダメなキャッチャーは打たれたくないばかりに、ピッチャーに細かいコントロールばかり要求する。その結果ピッチャーは、腕が縮こまって、かえっていいボールが投げられない。いいキャッチャーは、打たれたら俺が責任をとってやるから思い切って投げて来い」といってあげられる。その結果ピッチャーは腕

がよく振れて、かえっていいボールが投げられる」という話を聞いたことがありました。

僕は、この話を聞いて、子供も同じなのかなと思いました。細かいことばかり要求していると、どうしても子供は窮屈になってしまいます。逆に、先生が、お父さんお母さんが、「どんなボールでもいいから投げてください」と言うと、のびのびと育っていくことができると思います。そんなことを感じたので、どうしてもストライクゾーンからはみでがちな子供にも、「大丈夫だよ」と受け止めることが僕の教育観です。

——それは大切なことですね。

でも、もう一步踏み込んで、「そのストライクゾーンって誰が決めたの？」と考えると、それは大人が決めたものです。本来、子供はさまざまな特性があって、さまざまな存在ですが、やっぱり大人の都合で決められていってしまいます。

学校でも同じで、教育と合理性とは必ずしも一致しません。学校現場は、なるべく効率的に進めたいという担任の思いがあり、一回の指示で理解できない、周りの子と同じように動けない子には、どうしても言葉の荒げがちになってしまいます。

それはその子のせいというより、大人が勝手に作り出したストライクゾーンに入らないからです。その枠をどんどん広げて、どんな子でも大丈夫だよ、と自己肯定感を育てあげることが何より大切なことだという思いで、担任をしていました。これは、学校教育の現場だけではなく、子育てでも同じだと思っています。

このような流れから、今回の小説の題名を『だいたいぶ3組』としたのです。

——自己肯定感を育てるために、具体的にどのようなことをしたのですか。

4年生に対して、2分の1成人式という授業をしました。20歳の半分の10歳なので、2分の1成人式です。

子供が保護者の前で、それまで育ててくれたことに対する感謝の気持ちをスピーチしたりしたのですが、

僕が前向きな性格でいられたのは、「自己肯定感」を育んでもらえたから。
子供たちが今後、社会に出て、自分の力で力強く歩いていくためには、
学校教育でも、子育てでも、これが何より大事なことだと感じています。

乙武 洋匡

最後にサプライズで、保護者の方にも手紙を書いてもらい、子供たちに読んでもらいました。そうしたら、子供たちがぼろぼろ泣き出したのです。

子供に、私は愛されているんだ、認められているんだ、必要な存在とされているんだという気持ちを育むことの大切さを感じました。

—ご自身の自己肯定感が育まれた過程については、どのように考えていますか。

僕が障がいがあっても前向きな性格でいられたのは、周囲に自己肯定感を育んでもらっていたからだと思います。

多くの方が、『五体不満足』の中で一番印象的なシーンとしてあげてくださるのが、僕が生まれて一ヶ月後に初めて母に会ったとき、母が、卒倒してしまうのではないかという周囲の心配をよそに、「かわいい」と僕を受け入れてくれた場面です。あそこに、すべてが詰まっていると思います。自分はこの世に祝福されて生まれてきたんだ、という自己肯定感をたっぷりと養うことができたから、障がいがあるのに前向きな人格を形成することができたと思います。

そういうことを考えても、子供たちが今後、社会に出て、自分の力で力強く歩いていくためには、自己肯定感を育むことが大切だと思います。これを学校教育の中でも、子育ての中でも、共通して大事にしていかなければならないと感じます。

—3年間の教員生活を踏まえて、教員をやる前に思っていたことと変わったこととかはありますか。

僕自身は、物理的に障がいがあって、人から何か

してもらいが多いのですが、それが教員という立場になり、父親という立場にもなり、何かをしてあげたい、というように感情が変わってきました。

—今後はどのようなことをされるのですか。

今回、教員として3年間、その前には、新宿区教育委員会の非常勤職員「子どもの生き方パートナー」として2年間勤めて、合計5年間教育現場を経験しました。この貴重な体験を、乙武洋匡というフィルターを通して発信していきたいと思っています。具体的には、今回の小説もそうですが、メディア、講演会等でメッセージを発信していきたいと考えています。

また、今後も何かしら現場で子供たちと関わりながら感じたことを伝えていければと思っています。

—最後に、弁護士に対して、どのような印象をお持ちですか。

中学生から高校3年生くらいまでの5年間くらい、僕の将来の夢は弁護士でした。また、僕の妻も法学部出身で、司法試験の勉強をしていて、もう一歩で受かりそうな頃に僕と結婚しました。

したがって、僕たち夫婦にとって、弁護士という職業は、身近で憧れです。こういう形でお話を聞いていただけるのは、とても感慨深いです。

プロフィール おとたけ・ひろただ

1976年生まれ。早稲田大学在学中に出版した『五体不満足』は500万部を越すベストセラーに。大学卒業後、スポーツライター、新宿区教育委員会の非常勤職員「子どもの生き方パートナー」を経て、2007年4月から3年間杉並区立杉並第四小学校教諭として勤務。現在は、メディアを通して教育現場で得た経験を発信していく活動を柱としている。近著に『だいじょうぶ3組』。